紹介

小葉田淳編 若狭漁村史料

京都大学文学部国史研究室は昭和二八年より三〇年にかけて同学部地理学教室と共同して若狭漁村に残存する史料を徹底的に調査した。本書はその調査で採集された漁業・漁村関係史料のうち、中世・近世初期のもの全部およびそれ以降のもので特に重要と思われるものを収録したものである。全収録文書七〇一点、うち中世文書は丹生区有文書・大音文書・秦文書・阿倍文書を中心として四二五点である。

秦文書・大音文書を中心とする中世若狭漁村史料は早く大正八年福井県史編纂に際して発見・紹介されて以来、中世漁業史・漁村史研究の基本的史料として注目され、日本の中世漁業・漁村はこれらの文書をのぞいては語れなくなっている。これらの文書は従来『福井県史』・牧野信之助編『越前若狭古文書選』によって紹介され、学界の共同の財産として活用されてきた。しかしそれは全文書のうち珠玉のごとき一部だけであって、その全貌は全研究者のものとはなっていなかった。こういった条件のもとで旧くは羽原又吉氏「若狭沿海を中心とする中世漁業とその近代化」をはじめとして、その後小笠原長和氏「中世における海村の生活—若狭国多烏・汲部両浦—」（『史観』三七冊）、五味克夫氏「中世開発漁村の変遷—若狭田烏浦の場合—」（『鹿児島大学文理学部紀要』八号）、黒川正宏氏「中世海線村落の社会構造」（『史学研究』七一）、「中世海線村落における浦刀禰の存在形態」（『歴史教育』六の一〇）など個別研究が深められてきた。先述の京都大学国史研究室の調査に際して、あらたに遠敷郡志積において、秦文書、大音文書と肩をならべる中世文書安倍文書が発見され、このあらたな全面調査をもととして村井康彦氏「中世漁村の成立過程—若狭国遠敷郡多烏・汲部両浦の場合—」、楠瀬勝氏「中世の若狭網場漁業をめぐる二・三の問題—その成立と網について—」（『国史論集』一）が出されている。そしてこれらの研究をうけて最近では網野善彦氏「中世における漁場の成立」（『史学雑誌』七二〜七）が発表されている。このようにみてくるならば、これら若狭漁村の史料を研究者全体が手にとって検討しうることがどうしても必要となってきていることは明らかであった。その意味で本書の公刊は研究の発展の上で大きな寄与をなすものである。

しかもその寄与は単に中世・近世漁業史・漁村史の研究の上にのみではなく、それは特に中世若狭国全体を綜合的に研究する上にも大きな寄与をなすものである。若狭国は近国の小国であり、国衙単位に中世社会を把握するのにもっとも適した位置にあり、東寺領太良庄を中心とする東寺文書をはじめとして、壬生家新写古文書所収の国富庄関係史料や在地の明通寺文書、羽賀寺文書など更には一宮若狭彦社神絵系図などに本書所収中世文書や『小浜・敦賀・三国湊史料』所収の中世文書をあわせて、これらを全体として利用することができるとすれば、中世史研究に新しい前進をもたらすことができるにちがいない。その意味で、欲を云えばそれぞれの文書の残存の歴史的意味と史料批判の立場から吟味しておいていただきたかったと思う。一中世史研究者として調査・公刊にあたられた小葉田淳先

生をはじめ京大国史研究室の諸先学にたいしてあらためて感謝の意を表したいと思う。

（A5判　五八二頁・図版三九葉　昭和四十年七月　福井県郷土史懇談会〔福井県立図書館内〕刊　頒価二、五〇〇円　送料一五〇円）

（河音能平）

酒井忠雄著
時の科学としての歴史学

「個と全体との関係といい、行為を取扱うものとしてとらえて来た歴史学の性格は、更にそれらをむすびつける原理を求めている。個と全体の関係の追究は、哲学者の任務であり、行為は倫理学や行動科学が追究するものだ。それらを、即物的、外在的にとらえるのが、自然科学とすれば、歴史学はそれともちがつたところに、真の研究領域がある。

それは、個と全体の関係を、行動でとらえるという『時（とき）の科学』としてとらえなおすことである。」（九四―九五頁）

時とは、むろん物理的な「時間」ではない。「私は歴史学の基準を、まず行動におく。行動とは、表現であり、叙述であり、他に働きかけることである。働きかけるからには、その基準を、働きかけ、変更し、かえたかどうかの目標・目的におく。ということをぬいたいかなる行為も、無効である。そしてこの有効性をはかる手段として、時をもち出す」のである。

第一部　時の科学としての歴史学、第二部　時の科学としての歴史学・研究ノート、に分れた本書は、前著『歴史教育の理論と方法』（昭和三六年刊）・『日本史学史ノート』（昭和三八年刊）につづいて、歴史学とは何か、どのようにあらねばならないか、と問いかけ、真正面から迫ろうとしたエッセイ集であり、このような内容をもつ「時の科学」としての歴史学のあり方が提唱される。

著者の歎きを待つまでもなく、近時、歴史書の出版ブームといい、歴史専攻学生の急増といい、歴史の文運はいよいよさかんであるが、歴史学のあるべき姿は、混迷の度を深めている。およそ学問にとって、そのあるべき姿への反省は常に忘れてはならぬことであるにせよ、今日の歴史学界にあっては、その必要はひときわ痛感されるのである。長年にわたって、歴史学教育から史学史へと真摯な努力をつづけられてきた著者が、いま本書を世に問われたことは、まことに時宜を得たものというべきである。本書によって提示された問題の方向を、今後一層深く体系化されんことを切望する次第である。

（B6版　一五八頁　昭和四〇年五月　大明堂刊　定価三五〇円）

（熱田　公）

山岡桂二著
日本近代思想史に於ける政治と人間

本書の中心テーマは、近代日本における「政治的主体性」がどのように高まり、これとの関連の上に「人間的主体性」がどう開花してゆくかということであり、その指標として、「国民国家意識」が設定される。明治一〇年代、自由民権運動期に政治的主体性の意識が高まり、この政治的自覚を媒介に近代的な人間性の自覚もめばえる。二〇年代、人間個性の自覚に深まり、これと同時に民族の歴史的個性に対する意識を昂揚せしめ、ここに近代的国民（ブルジョアジ